

---

# 雨上がりの空の下

西瓜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

雨上がりの空の下

### 【Nコード】

N4847F

### 【作者名】

西瓜

### 【あらすじ】

高校一年、鈴川結城。スズカワユウキ 同じく高校一年、姫野由紀乃。ヒメノユキノ 高校生活をする、普通の高校生。だけど、由紀乃には、男の人が苦手な訳が…

## プロローグ（前書き）

駄文ですが、読んでいただけたら幸いです。

## プロローグ

「ねえ、あれから…、どれくらいたったのかな?…。」  
雨が降っていた。

「あなたは、元気?…。私は、元気だよ。」彼女は泣いていた。雨が彼女の涙を、洗い流していた。

「全部あなたのおかげだよ。ありがとう…。」

緑の丘は星空を、綺麗に映しだしていた。

彼女は笑っていた。

## 一、鈴川結城

「お前、ホントにすげえな！」

「そんなことねえって…。」

「だるい。コイツっていると疲れる。」

「あはは」

俺、鈴川結城。

つと、隣のコイツが、竹内直…。

コイツが問題なんだよなあ。

「今日もサッカーで、一試合で4得点！」

「だから！たまたまだっつーの。」

「ほら、あんたたち！」

直の彼女だ…。

2倍めんどい。

「梨佳」

「ちよつと、ギリギリで宇山高、はいったんだから、直は勉強しなさい！」

植野梨佳。お節介女。今日もテンション高え…。

「もう一度言うわよ…、直は勉強しなさい！」

「うわっ、それ言うなよ。」

「俺、だるいから帰るわ。」

「分かったぜヒーロー」

「結城君、また明日ねえ。」

ようやく解放された…。

「はあ…。家まで遠いなあ…。」

ホントはそんなんじゃないで、帰りたくないだけ…なんだよな。」

あれ？あれは…。」

門の前にたってんの…。

同じ一年の…。てか！同じクラスの奴じゃん！

確か…。姫野？…。だっけ。

「まあいいか。」

「ぶ〜ん」

「痛っ！」

なんだコイツ？

小学生か。

「あれれ？お兄ちゃんゴメンね。」

「ちゃんと前見てあるけよ？」

「はあい」

「あつ！達也！」

姫野？いつの間に。

「あんた確か…。鈴川君？」

「あ、ああ。」

やべえ、早く帰んねえと。帰りたくねえけど。

「達也、お兄ちゃんに謝った？」

「うん」

「鈴川君、ゴメンね。」

「いや、いいけど。」

やべえ俺、露骨に早く帰りてえ…。って顔してる。

「じゃ、またね。」

「おう。またな。」

てか、初めてしゃべった…。よな。

「バイバイ、お兄ちゃん。」

「またな。」

急げ俺！

「ゼエ…ハア…、た、ただいま…。」

「あら、おかえり結城。」

急げ急げ。

「お風呂入ってよ、結城。」

「ゴメン、急いでっから。」

「何よ…、あの子ったら。」

ふう、間に合った。

これが観たかったんだよ

「へえ、今日の試合は、日本対トルコ。見ものですね。」

「トルコか、日本負けん…」

「コラ！結城！」

！…、何だよ。

て、まさか…。

「親父！」

俺の帰りたくない理由。怒鳴る親父…。

「母さんが風呂に入れと、言ってるぞ！早く行きなさい。」

「…。了解…。」

俺の娯楽の時間が…。

## 二、鈴川結城2

「ああ、試合終わっちった。」

親父の命令は絶対。…なんだよな…。

「全く、…。」

眠くなってきたなあ。

「よし！寝るか！」

「結城く、晩ご飯よ。」

行かねえ。親父がきても行かねえ。

寝てーんだよ…。

ギュルルル…。

結城のお腹は嘘をつかないようだ。

「くそっ！」

ギュルル…。

「母ちゃん、今行く。」

結城は階段をものすごい速さでかけていった。

二人が初めて会話した日。天気は曇りだった。

「やべえ！寝坊したあ！」

「パン食わえてどこ行くの？」

「学校だよ！」

「あら、今日日曜よ。」

結城の耳には、届いていなかった。

「ふっ…。もう最悪。」

今日、日曜じゃねえか。

「もう…。私ったら、今日日曜じゃん。」

お、おいまさか…。



「姫野じゃん！」

「え？」

「何だよ、今日日曜だぜ。」

「鈴川君こそ、私と同じみたいね。」

「違う違う！これは、その…。」

「あゝあ、高校って、土曜日もあるから…、日曜もあるかなあ、つて、勘違いしちゃった。」

俺もだ。

「へ、へえ…。俺は朝のジョギングだぜ。」

（鈴川君の声、震えてる。ふふ。）

「何だよ、にやにやして！」

「別にい、…。」

「じゃ、俺は帰っからな。」

「私も。」

ふゝ。恥かくとこだったぜ…。

「それと、鈴川君？」

「ん？」

「嘘が下手だぞ！制服で、ジョギングする人がいるの？」  
「げっ！バレた…。」

「最初から知ってたなあ…。」

あれ？もう行っちゃったか。

「何だこれ？」

【姫野由紀乃 1993年6月6日生まれ 音楽部所属 宇山高校  
一年B組】

「あつ！アイツ、これ、学生証じゃん。落としたのか。」

アイツ、由紀乃って名前なんだ…。

「音楽部…か、俺と真逆だな。」

つて、俺も帰んなきゃ！姫野のせいで時間くっちゃまった。

「はあ…。」

結城は、走りだした。

### 三、姫野由紀乃

「なっ、ない！」

私の学生証…。

「再発行…、できないんだよね。」

「プルル

「電話だ、誰だろ？…、梨佳だ。」

「プルル

「もしもし？」

「くあっ！由紀乃？」

「何よもう、こんなときにい。」

「あれ？ふふふ、怒ってる。」

「笑うなあ！」

「学生証の、ことでしょ？」

「！？そうよ。それなの！」

「梨佳、あなた！いつから超能力に、目覚めたの？」

「結城君が、拾ってくれてたんだよ。」

鈴川君が？

「わあ、どうしてだろ？」

「とりあえず、あたし由紀乃ん家に、近いから。」

「ありがと。外で待ってるね。」

「ブツン…」

「くプー…プー…」

由紀乃も走りだした。

「ゴメンね。」

「いいよ。」

「なんで、私ん家の近く居たの？」

梨佳は、ビシッと一軒の家を指差した。

「あの家が…、どうかした？」

「どうかした？じゃ、ないわよ。あれは直の家！」

「えええ！？近すぎて気付かなかった。」

これが【灯台もと暗し】かな。ふふ。

「今日は、直の誕生日なんだあ。」

「そうなの。じゃ、早く行ってあげなよ。」

「うん そうする。」

「梨佳、ありがとね」

「お安い御用さあ …。」

「ん？梨佳、どうかした？」

「あたしだって、できたんだから！由紀乃もきつと、できるよ。」

「何が？？」

「決まってるじゃない。…、カ、レ、シ。」

「ええ？私はいいよ…。」

「どして？」

「だって、…。」

プルル

電話だ…。

「【鈴川結城】…。」

「ふふ。」

「何で！？鈴川君が…、私の番号を。」

「あたしが教えた。」

「また！勝手な事お！」

「まあまあ、恋の相手は、以外と近くにいたりしてね」

「もう、からかわないでよ！」

「早くでてあげな。」

「もしもし？鈴川君？」

「…おっ？学生証、植野から受け取った？」

「うん…。」

「…よかった。」

「ありがとう。」

「く気にすんな。じゃ、またな。」

「もう、梨佳ったら…、ま、いつか。梨佳いないし…。」  
直の家から、明るい声が聞こえた。

「彼氏なんて、いないよ…。」

由紀乃は、自分の部屋のベッドに入った。

#### 四、姫野由紀乃2

「彼氏なんて、男の人なんて、…。」  
信用できない…。」

由紀乃は、そのまま、眠りについた。

「起きろ、起きろ、朝だぞ！わぁうん！」

「うん…、もう、朝かぁ。」

「わぁうん！」

「ワン太郎ちゃん、もういいよ。」

ポチッ。アラーム機能の、犬(?)型時計が、鳴りやんだ。

「学校、行くぞ。」

由紀乃は、家を出た。

キンコーンカーンコーン

「今日の授業は、終わりだ。」

山田先生、またネクタイ曲がってる。

「ん？姫野、先生の顔に何かついてるか？」

「いいえ。」

「やけに嬉しそうだな。先生も嬉しくなるぞ、ワッハッハ。」  
だって、顔じゃなくてネクタイだもん。ふふ。

(姫野の奴、今日変だな、元気を装おってる…っていうか。)

「先生、音楽部、行ってきます。」

「そうかそうか！がんばれよ。ワッハッハ。」

「はい…。」

(やっぱり、変だよな…。)

キンコンカーンコン

（いっけね！俺もサッカー部…。）

「…。ふふ。そんな昔のこと、思いだして…。私ったら。」

二人は、教室を後にした。

「由紀乃ちゃん？元氣ないみたいよ？」

「あつ！佐野先生、私元氣ですよ。ね。」

「そう…、そうみたいね。」

「由紀乃、風邪でもひいたか？」

あつ！3年C組の、飯田夕美先輩。

「大丈夫ですよ。先輩。」

「よっしゃ、その意気だ。うちら3年も、頑張らないとな。」

「だね、夕美。」

石野遥先輩だ。

「遥も風邪ひくなよ。」

「まるで私が、ひいてるみたいじゃないですか。」

「あれ？由紀乃、ひいてなかったか。」

「ひいてませんよーだ！」

「ははは。」

そう、こうやって、男の人なんて信用できないもん、女の人と…。

## 五、クラスメート

キンコンカーンコン

「ふぁー、疲れたー。」

これで、帰れるぜ！

「今日の練習は、終わりだ！」

つたく、顧問の上田、厳しくって…疲れる。

「解散！」

「ありがとうございました！」

「ああ、また親父に怒鳴られる、かも。」

あれ？植野だ。

「アイツなら…。」

「だから！あたしは、知らないって、結城君？ちよつと、聞いている？」

「姫野は、何で元気ないんだよ…。」

「ちよつと、また聞いてない…。その質問3回目だよ？」

「！…、そうか。悪かったな。」

「結城君？大丈夫？」

「あ、ああ。」

「結城君…は、何で由紀乃のために、そんなに熱くなってるの？」

「そりゃ、一応クラスメートだから…、…。」

「ふうん。」

クラスメートだから…。本当の気持ちか、別にあるのか？俺は…。

「実はね、由紀乃は、男の人がちよつと苦手なの。」

「えっ？」

「これは、由紀乃に、口止めされてたんだけど…。」

「苦手って、どんな風に？」

「近くに居られないって、感じ…なのかな。」

「俺とは、しゃべってたじゃないか！」

「うん…。あたし、直の誕生日の日…、由紀乃に学生証、届けたとき、由紀乃を誕生日に誘わなかったんだ…。」

「ああ…。」

「由紀乃ね、直も、ダメみたいなの。」

「…。」

「でもね、結城君だけは、大丈夫みたいなの。」

「え？」

「だから…、あなたなら、由紀乃の、心の問題だけど…、結城君なら、少しでも、由紀乃の心の支えになってくれるかな…、って…。」

「…。」

「あたし、思ってたんだ…。」

二人は黙ったまま、空を見ている。

雨が降ってきた。

「俺、由紀乃の力になれるか、分からないけど…。」

「はいっ、傘！」

植野梨佳、悪い奴じゃないな…。

「行ってくる。」

結城の言葉には、力強さと、優しさがこもっていた。



## 六、過去

「やっぱり、ここにいたんだな…。姫野。」

由紀乃は泣いていた。

「植野から聞いたぞ。一人になりたいときは、ここにくるって。」

【緑の丘】。この街全体を見渡せる、丘を街の人は、そう呼んでいる。

「何で…？私とあなたは、他人じゃない…。何で私のために、こんなところまで…、くるの…？」「それは…、俺たちは、クラスメートだろ。隠し事なんかしないで、嫌な事があるなら、言ってみるよ…。」

「あなたに言つて、なんになるのよ…。」

「…俺からは、逃げないんだな…。」

「え？…。」

結城は、由紀乃の隣に座った。

「ほら、姫野…、お前、男が苦手なんだって？」

「梨佳から…、聞いたんだ…。」

由紀乃は、荷物と楽器を右に寄せた。

「綺麗だな…、ここから見る空は。」

雨は、止んでいた。

「うん…。」

結城の気持ちと、由紀乃の気持ちは、今、一つになっている。

「私ね、入学式の時から、鈴川君は、今までの人と違う…、人だと思ってたんだ。」

「…。」

「私ね、小学校の時、いじめられていたの…。」「えっ？…。」

「それでも、友達もいたし、耐えられる。って、思ってたの。」

空の星が、一層強く、光った。

「でもね、日に日にエスカレートして…、耐えられなくなって…、

私、死んじゃおうかなって…。思ったんだ。」

「…。」

結城は、自分の気持ちに、気付きはじめていた。

「すると、一人の男の子がね、私を庇ってくれたの…。」

「由紀乃をいじめていた…。奴らも男だな…。?…。」

由紀乃は、泣いてはいなかった。涙が枯れてしまったのか、目に力がない。

「その男の子は、私を庇ったばかりに、皆から、私の代わりにいじめを受けたの…。」

由紀乃は立った。

「でね、その男の子に、ありがとうって、伝えようと、…。」

由紀乃は前に進む。

「おい、姫野?」

「そしたら、次の日に、男の子…。そのいじめをしていた…。男の子達に、道路に突き飛ばされて…。」

由紀乃は、丘のギリギリで立っている。

「死んじやったの…。」

「姫野…!」

「全部、私のせい…。」

「お前は、それで、男が…。」

小さな雨の滴が、二人を濡らす。

「でもね、結城君、あなたはね…。あの男の子みたいなんだ…。」

「…。」

「優しい…。優しい心を持ってる。」

「ありがとう…。」

「おい…。やめろ…。」

由紀乃の体が、結城の視界から消える。

「由紀乃おおおおおっ!!!!!!!!!!!!!!」

## 七、想い

星空は、輝きを増していた。

【緑の丘】は、今日も優しく、街を見渡す。  
優しく…。

「うう…、うわああん…。」

「ハアハア…。」

「何で！？何で助けるのよ…！」

「勝手な…、事、するな、ハア…。」

「うう…。」

「俺は…、植野に頼まれたんだ。」

結城は自分の気持ちに、気付いていた。「由紀乃の、心の…、支え  
になって…。」

雨が強くなる。

「そう、頼まれたんだ。」

由紀乃は、俯いたまま、泣いている。

「こんなに想ってくれる、友達がいるんだ。お前は、一人じゃない  
…。お前は何も悪くないんだ。」

「私…、入学式に、周りに男の人が、いっぱいいて…、思いだしち  
やって…。あの、怖い感覚を…。」

「なあ…、由紀乃。」

「あれ？…。姫野じゃないんだね。」

「これからは、由紀乃のこと、俺が守っちゃダメかな…。」

由紀乃は泣き止んでいた。

「私、こんなに…、嬉しい気持ち、知らなかった…。」

由紀乃は右手の、荷物の中から、ウ、アイオリンを取り出した。

由紀乃は、ウゝ アイオリンを弾きはじめた。

「綺麗だ…。この夜空よりも…。」

その音色は、どこまでも…、どこまでも、響き渡った。

それは、雨上がりの空のでき事だった。

「由紀乃、好きだ…。」

結城は、自分の方へ、由紀乃を引き寄せると、やがて深いキスに…、二人の時間は止まっていた。

「帰るか。」

「うん。」

二人は、この日はじめて、自分の気持ちに向き合うことができた。

由紀乃は、自分の過去に打ち勝った。

由紀乃は幸せだった。そう…、今は…。

くプルル

「もしもし？俺だよ。由紀乃？」

この電話から、物語は、大きく傾くことになる。

## 八、その時…

「私、どうしていいか…、分からないよ…。」

「意識が、回復しません!」

「声をかけてあげて下さい!」

「なあ…、皆来てるぜ、起きろよ!」

「……君!起きて!」

「起きてよ、また笑ってよ、結城!」

……

……

【あの日】から、数カ月後…。

くブルル

「もしもし?俺だよ。由紀乃?」

由紀乃は、慌てた様子でいる。

「もしもし…?結城?」

「何か用なら、メールすればいいの…。」

…?

「聞こえねえよ?由紀乃?」

「今何て言ったの？由紀乃？」

「た…やが…。」

「由紀乃、落ちついて、話してみて。」

「達也が…、達也が！肺炎を起こしたの！」

「なん…だって？」

【岩井達也。由紀乃の、いここに当たる。持病の喘息を持ち、現在は小学生。】

「その達也が、肺炎で、命に関わるんじゃない…。」

「わあああん…！」

由紀乃の泣き声が、聞こえる。

「分かった…。場所は何処だ？すぐ行く。」

「うふう…東…山の…病院。」

結城は、自転車で、走りだしていた。

「くそっ！どけえー！」

街中の人混みを、抜けて行く結城。

「早く変われ…。」

今の結城には、信号すら、苛立ちの種になっている。

「変わった。」

信号が変わった…。

「逃げ。逃げ。逃げ。」

何かのデータが、インプットされたかのように、結城は走っていた。  
ブブブー…！！

大型トラックの、クラクションが、道路中に、響き渡った。

鈍い音とともに…。

結城の携帯の画面には、  
【達也は落ちついたよ…。よかった。】  
by 由紀乃  
と、映しだされていた。

九、それから…

…ドクン…

…ドクン…

ここは、どこだ…？

俺は…、誰だ…？

思い出せ…。思い出せ！

誰かが呼ぶ声が…、聞こえる。

「……！起…よ…！」

「…結…城！」

そうか、俺は…。

全部、思いだした。

ここで、こんな真つ暗な…、ところで、寝ている場合じゃない…。  
守らなくちゃ、いけない人が、いるんだ。

俺の身体…、言うことを聞け！

何でだ…。

身体が、言うことを聞かない…。

声が、段々遠くなっていく…。由紀乃…。

…ドクン…ドクン…

…ドクン…ドクン…ドクン…

…



「結城いい！！！！！！！！！！！！！！」

「御臨終です……。」

「うわああああああああわああ！」

「何で…、何でだよ…」

「結城君、……。嘘……。なんでしょ……。？」

この夜、由紀乃だけが、結城の傍を離れず、一生で最大の量の涙を、流した。

そう、まるで、そこに雨が降ったように、…。

それから、数年後……。

「ねえ、見て。お母さん。」

「なあに？結衣？」

「今日も、あのお姉ちゃん、彼処に座ってる。何してるのかな？」

「人は、皆ね、辛いとき、嬉しいとき、悲しいとき、楽しいとき、あんな風にするんだよ。」

「ふうん。あんまり分かんないや。行こ、お母さん。」

「梨佳、またここに、きてたのか。」

「直……うん。」

「あれれ？お母さんも、お父さんも、みすてりいな感じだね。」

「また結衣、どこでそんな言葉、覚えたの？」

「幼稚園だもーん。」

「そう。」

「行こうか。梨佳、そっとしておいて、あげよう。」  
「そうね…。」

## エピソード

「ねえ、結城。あれから、どれくらいたったのかな？」

由紀乃は泣いていた。

鈴川結城。そう書かれた墓には、暖かい雨が、降っていた。

「結城がいなくなって、私大変だったんだよ。ふふ。」

空から雨が落ちる。

「今、梨佳と直は、結婚して、ちょっと羨ましいな。って、思うこともあるんだ。」

「結城のせいだぞ。ふふ。」

「結城のお父さんも、お母さんも、大変だったみたい…。」

「昔の、音楽部の先輩たちは、有名な音楽家になっちゃった。」

「あんたのいた、サッカー部も、地道に今でも、宇山高校サッカー部。として、頑張ってるみたい。エースストライカーが、いなかったらダメじゃない…。」

「達也も、大きくなったんだよ。」

「…うう…。」

「ゴメンね…。結城…。私のせいで…。」

由紀乃が言い終わると、風が吹いた。優しい風が…。

「でも、やっぱり、あなたに一番伝えたいのは、ありがとう。かな…。」

「私ね、今、男の人怖くないよ。」

暖かい雨と、空からの雨。

止んでいた。

「全部、ぜんぶ、ぜーんぶ！」

「あなたのおかげだよ…。」

「あなたが、ここで、私を助けてくれた。あなたが私の過去を、変えてくれた。あなたが…。」

今日も、【緑の丘】は、優しく、美しく、夜空を映していた。

雨上がりの空の出来事だった…。

「由紀乃」

何泣いてんだよ。」

由紀乃は振り返る。

何もなかった…。

由紀乃は、確信していた。

「結城…。」

由紀乃は、ウァイオリンに手を伸ばす。

## エピソード（後書き）

最後まで、読んで下さった皆さま、本当に、本当にありがとうございました！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4847f/>

---

雨上がりの空の下

2010年12月18日03時41分発行